開催結果報告

円山川の自然再生フォーラム

トキとコウノトリ 野生復帰への挑戦

２月１７日（木）、兵庫県立人と自然の博物館にて「トキとコウノトリ、野生復帰への挑戦」と題しフォーラムが開催（整備局は協賛）されました。定員４００名のところに、当日３８３名の参加があり、大盛況に終わりました。

フォーラムは、トキとコウノトリを含む湿地の鳥類の保全・再生に取り組んでいる研究者３名の講演、そして行政の立場として豊口河川環境課長の講演と続き、その後、兵庫県立大学江崎教授の進行のもと、講演者４名によるパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッションの中では聴講者からの質問や意見等を受けましたが、一般の方々のコウノトリの野生復帰をはじめとする様々の自然再生に対する関心の高さを感じることができました。

◇はじめに　「水辺の鳥類にとっての河川と水田」
兵庫県立大学　江崎教授

フォーラム開催のあいさつとともに、水辺の鳥類にとっての河川と水田のもつ意味について話題提供をして頂いた。コウノトリの野生復帰には、水田の生物生産力を回復させることがまず必須であると述べられた。

◇講演１　「トキの野生復帰に向けての現状と課題」
新潟大学　三浦教授

休耕田や放棄田等の連続性を持たせた一体的な「擬似湿地」への積極的な利用を提案された。また、トキ及びコウノトリの野生復帰のためには、行政からのトップダウンではなく地域の自発的な取り組みが重要であることを述べられた。

◇講演２　「コウノトリを野生復帰する意味」
―荒ぶる自然とも折り合いをつける―
兵庫県立大学　池田教授

「優美な自然」と「荒ぶる自然」は決して対立するものではなく、自然と共生するということは、荒ぶる自然を少しくらいは引き受けるということに他ならない。そうすることにより、土地の生産力、生物多様性、歴史・文化性といった多元的価値を享受できるようになる。と述べられた。

◇講演３　「水田生態系の多様性を高め、水鳥の生息環境を復元する手法としての『ふゆ・みず・たんぼ』」
日本雁を保護する会　呉地会長

冬期間に水をはった田んぼは、日本で越冬する水鳥にとって、大きな誘因力をもつことを示し、湿地に依存する生物とその生息環境を復元すると述べられた。また、冬季湛水の全国的なネットワークへの拡大を提案された。

◇講演４　「自然との共生～災害対策と自然再生～」
近畿地方整備局　豊口河川環境課長

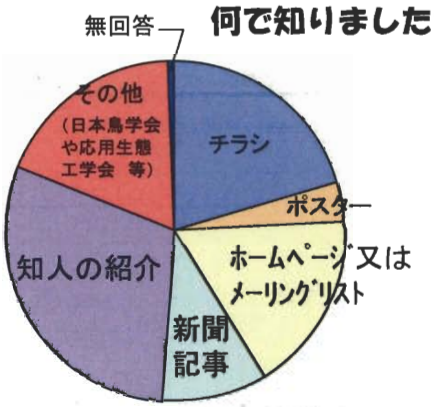
昨年の度重なった災害の報告の後、河川特性を理解した上での河川整備や地域づくりについて述べられた。

パネルディスカッションの様子

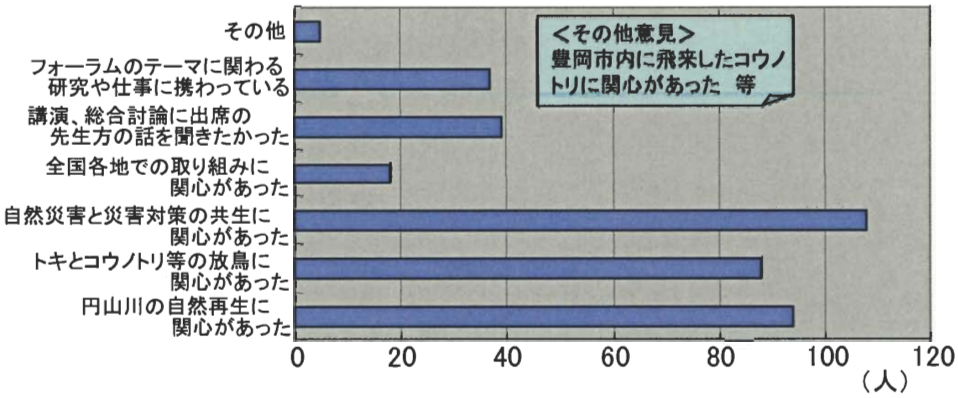
会場入り口付近には災害の写真や円山川の懐かしの写真が展示された。

参加者によるアンケート結果　（180名より回答）

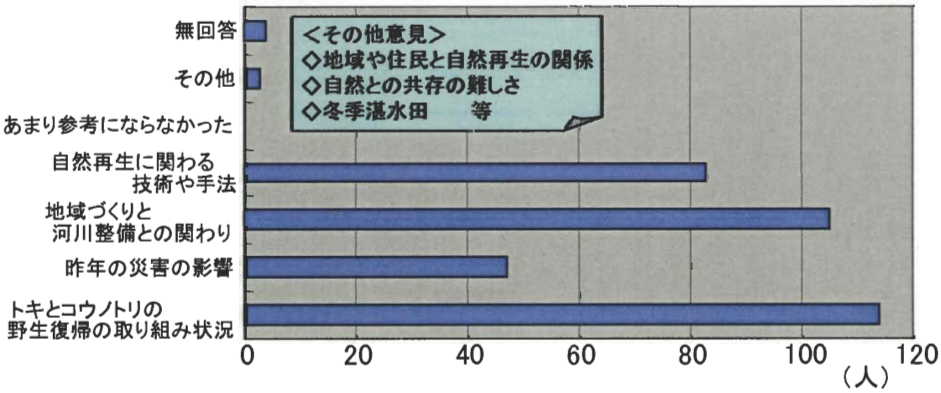
問1　今回のフォーラムを何で知りましたか？



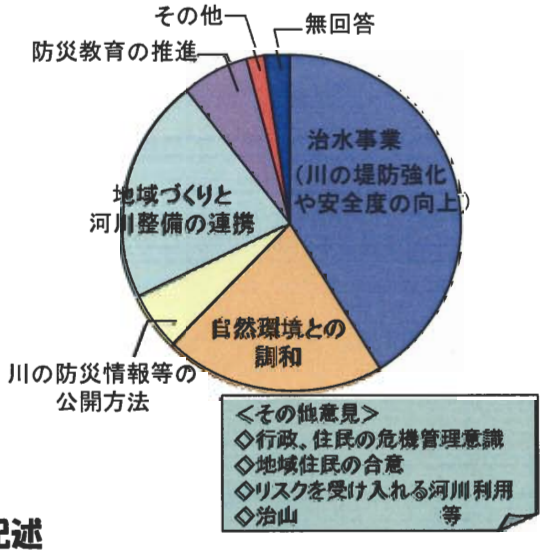
問2　今回のフォーラムに参加された目的は？（複数回答）



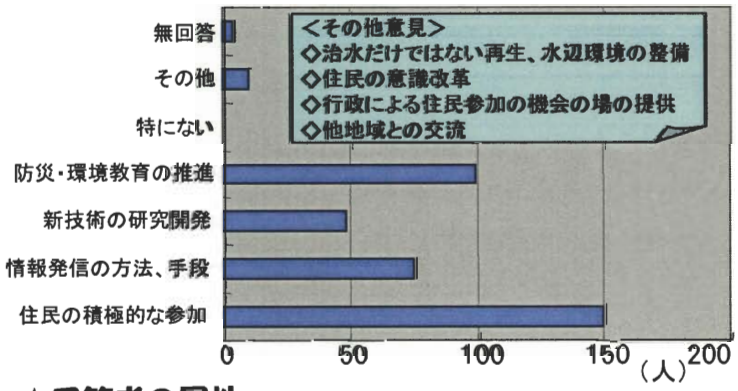
問3　今回のフォーラムでどのようなことが参考になりましたか？　（複数回答）



問4　災害対策を進めていく上で、重要と思われるものは？



問5　円山川の自然再生を進めていく上で重要と思われることは？　（複数回答）

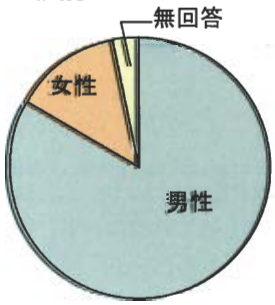


問6　自由記述

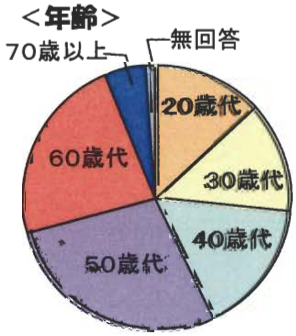
○自然との共生には子供から大人まで住民全部の参画が必要（会社員／60歳代）
○国土交通省と農林水産省との連携が重要（研究者／60歳代）
○自然との共生において、人間の側でもいくらかのリスクを引き受けるという話について非常に同感した。快適だけを求める方向は無理だということを多くの人が気付くような世間をつくるようにしていきたい。（学生／20歳代）
○都市には皆無である共生の考えが放鳥等の活動を通じて広がっていくことを期待する。（その他／20歳代）
○自然再生に伴う住民は事業者の負担と喜び、地域の取り組み等、生の姿を紹介してほしい。（研究者／30歳代）
○住民参加を促すためにどのような取り組みを行っているのか、行おうとしているのか、これまでの事例も含めて聞きたかった。（研究者／30歳代）
○自然災害と自然再生が両立する具体的な方法がわからない（会社員／50歳代）
○今後、日本各地で進行する自然再生プロジェクトの先行事例として全国に発信する必要がある。（会社員／20歳代）
○このような取り組みをさらに広げるため、参加と実践を心がける。（公務員／50歳代）
○環境との共生を改めて認識したフォーラムだった。（会社員／60歳代）
○放鳥が近づいたコウノトリについて、今後もフォローするような催しを望む（研究者／60歳代）

☆回答者の属性

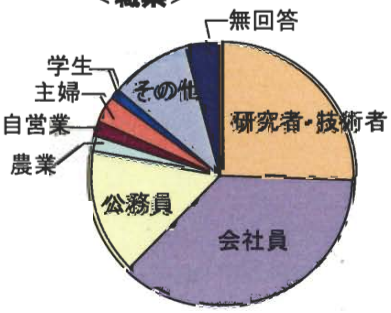
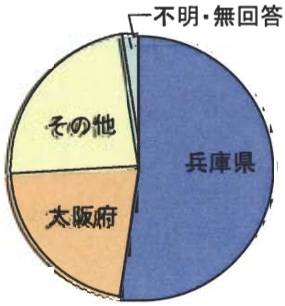
<性別>



<年齢>



<職業>



<住所>